

次の企業と FIVE STAR MAGAZINE は士業界を応援しています。

Powered By
ご協賛企業



ストライク

NOTHING IS
impossible

特集

士業界の 「新しい地図」 2025

士業事務所のための経営専門誌

The Magazine for Professional Firms

オオノオ!!

連載

“ I can't believe
ChatGPT
can do this! ”

こんなことまで できるなんて!

取材／セブンセンス税理士法人（東京都台東区）
ディレクター 公認会計士・税理士 大野修平氏

第2回 取材日

2024.12.3

このまま ChatGPT が進化すれば、士業を始めとするホワイトカラーの仕事は奪われていく——!? そのことに危惧を感じた我々は、“税理士業界における ChatGPT の第一人者”大野修平氏とともに、ChatGPT の進化の動向をウォッチしていくことにした。ChatGPT の進化は止まらない。それどころか早まるばかりだ——

オオノオ!! なんてこった!!

(文・武田司、GPT-4o)

税務顧問がなくなっていく中で…

—話は逸れますが、先日開催された「税理士サミット 2024」で大野先生がファシリテーターを務めた第二会場での free とマネーフォワードの対談。第一会場では両社の佐々木 CEO と社長との対談がありましたが、私はそれを聞いていて「税務顧問はなくなるのだな」と感じました。お二人は「なくなる」とは一言も言っていないのですが、その件について、大野先生はどう思われますか？

大野: いわゆる税務顧問のほとんどの業務はなくなる、正確には生成 AI などに置き換わるでしょうね。それは間違いなくて、問題はいつなくなるのかだと思います。そのタイム



スパンについてはさまざまな考えがありますが、早いと考えるか遅いと考えるかの違いだけだと思います。もし、なくなると言っている人がいるとすれば、それは希望的観測が入っているのだらうと思います。私だって、なくなってほしくはありません。

—特に中小零細企業では、必要とされなくなりますよね？

大野：いずれ大きな企業においても必要とされなくなると思います。

税理士が不要となるか、ならないか？ このときの論点はいくつかあると思いますが、税理士法があるので税理士資格そのものはなくなるとは思いません。しかし、税理士に顧問を依頼すれば年間数十万円から数百万円かかるところを、AIを使えば年間数万円ほど済むようになるのなら、税理士に依頼する人はいなくなるとは思います。

もう一つのよくある論点は、何か問題が起きたときに誰が責任を取るかという議論です。多くの人は責任を取れるのは人間だけであり、これまでも税理士が責任を取ってきたと言うのですが、本当に私たち税理士は責任を取ってきたのか、そこはよく考える必要があると思います。追徴課税になったときに税理士が自腹を切るケースもあるかもしれませんが、大半は税理士職業賠償責任保険（税賠保険）でカバーしていると思います。税賠保険は税理士しか加入できないものですが、それは現時点での話で、多くの人が自分で申告をし始めたら、それに対応する損害保険が出てくるでしょう。であれば、納税者自らがその保険に加入すればよいだけだと思います。

—そうした保険商品は販売されるでしょうね。

大野：税法は複雑なので、AIで扱えるものではないと言う人もいます。しかし、それも現時点での話です。たしかに私たち税理士は通達や判例なども含めて判断していて、現時点のAIではそこまでの判断はできないのですが、明日にはわからないというのが生成AIの世界です。

—それだけ、進化が早いですからね。

大野：ではどうしたらよいのかという話ですが、その答えは一つではないと思います。これをしておけば大丈夫という、そんな単純な話ではありません。

世界はもっと複雑で、複雑に組み合わせられている中で、さまざまな歪みやギャップが生まれ、その中にはAIでもできるけれど人間にお願いしたいというニーズがきつとあると思います。私は現時点では、そのように考えています。

「ウェブ検索」が可能になった!!

—話を生成AIに戻します。一口に生成AIと言っても、いろいろなものがありますよね。

大野：そうですね。例えばGMOさんがリリースした『天秤.AI』などは面白い切り口です。ChatGPTとGemini、Claude(クロード)など、複数の生成AIに同時に質問ができ、一覽で回答を比較できるツールになっています【写真】。

『Napkin AI』はさまざまな使い方ができま

すが、「Draft with AI」から、キーワードを入力するだけで記事を書いてもらう、という使い方もあります。さらに、ボタン1つで文章の内容に合った図版を作成してくれます。もちろん、自分が書いた文章を推敲したり、図を変更・編集したりすることもできます【写真左】。

Googleの『NotebookLM』は、士業との相性が抜群に良いツールだと思います。アップロード機能があって、例えばNotebookLMに、中小企業庁の「中小企業税制〈令和5年度版〉」のPDFを読み込ませ、「少額減価償却資産の特例の適用手続きについて、詳しく教えて下さい」と質問すると、PDFをソースに回答を作成してくれます【写真右】。社内の職務規定だけから、情報を引っ張ってきたいときなどにも活用できると思います。

—そんなにたくさんあっても、なかなか使いこなせなそうですね（苦笑）。

大野：そうですね。すべてのツールを追いかけられるのは難しいので、少なくともChatGPTくらいは常日頃から触れていてほしいと思います。

ChatGPTも、現在はさまざまなモデルが出ています。例えば、「ChatGPT4o with canvas」というモデルは文章を作成するときには有用なモデルになっています。

—ChatGPTが、「4o」や「o1」や「canvas」などのモデルに分かれているのはどういうことなのですか？【次ページ写真左】

大野：それぞれ、得意なことやできることが異なると理解すればよいと思います。「o1」は、現時点では画像以外の添付やサーチモード機能は使えないのですが、推論や計算が得意なモデルなので、データ分析などに使えます。「canvas」は前述したように、文章の作

成に特化したモデルです。

—それから、ChatGPTではWeb検索もできるようになったんですよね？

大野：検索は「4o」なら「ウェブを検索」ボタンを押すだけでサーチモードになります。

サーチモードで検索すると情報源も合わせて検索結果をまとめ、回答してくれます。

私は新しい機能がリリースされると、その機能がもっとも力を発揮する活用方法を考えます。例えばサーチモードでは「go.jpドメインだけから検索して」と伝えれば、政府の信頼性の高いドメインにあるリソースだけを参照して回答してくれます【次ページ写真右】。

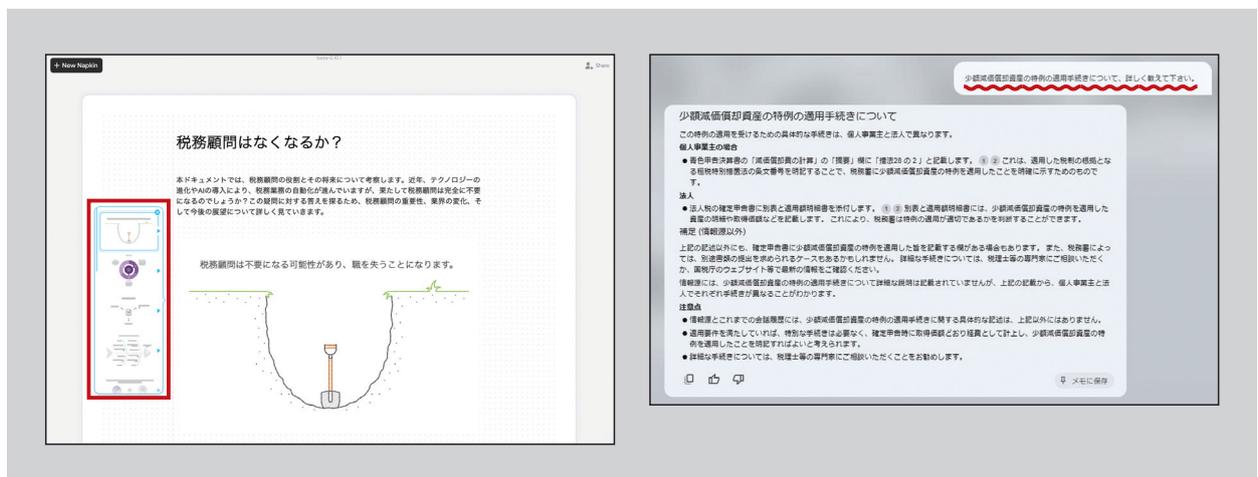
—なるほど、だからやっぱり使い方が重要になりますね。

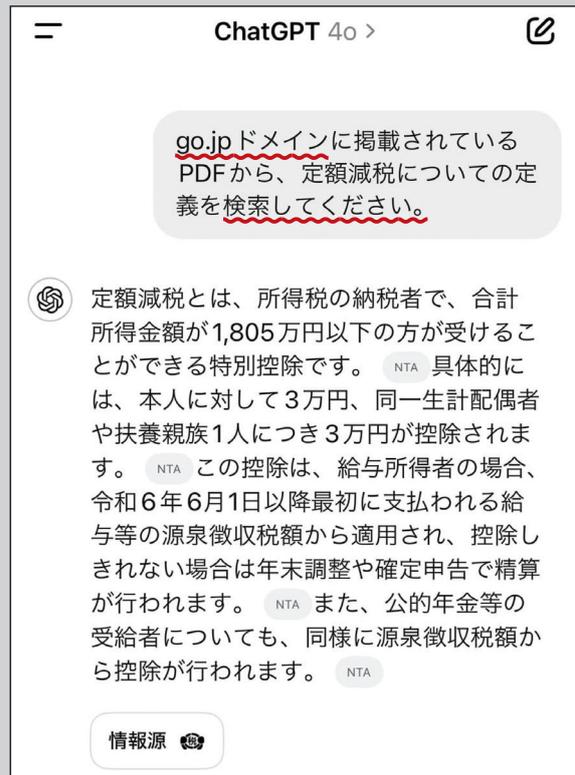
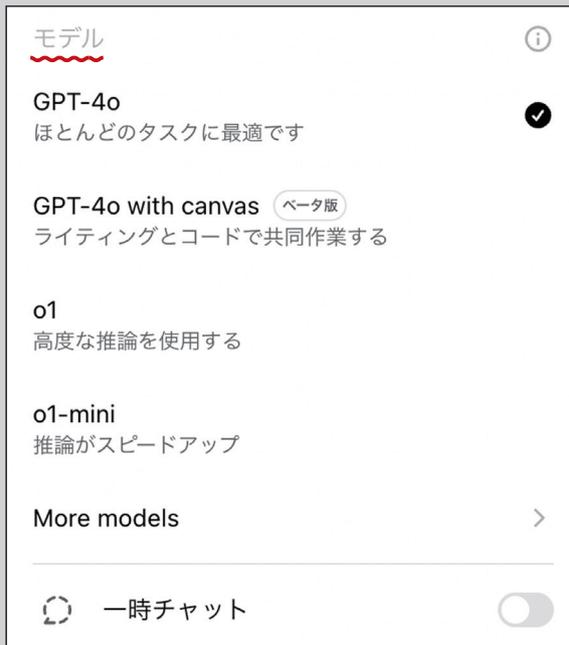
大野：そうですね。ほかにも私たちが事業計画を作るときには、「フェルミ推定」（入手できる情報をもとに論理的に推論し、概算値を求めること）を使用することがあります。例えば、東京都の年間のおにぎりの消費量についてGoogleなどで検索しても出てこないと思いますが、ChatGPTのサーチモードで「フェルミ推定して」とお願いすれば、推定に必要な数値を検索し、それらを元に推定した結果を教えてください。もちろん、元数値の検索結果のリソース付きで。

「人でなくてもいい」世界

—最近ようやく、ChatGPTをどう使えばよいのか分かってきたように感じていたのですが、「分かってきた」と思ったらずでChatGPTは遥か先を行っていますね（苦笑）。

大野：だからこそ、常に触っていないとダメなんですよ。学んでから使うのではなく、分からなくても触っておくことで、そのうちに





使い方が分かってくるようになっていきます。

そういえば、デスクトップでも音声会話ができるようになりました。これなどは、例えば、常時立ち上げておいて、何かわからないことがあったときに音声で質問したりなど、アシスタントやコーチのように使えます。

—まるでSFの世界ですね。さきほどのフェルミ推定もそうですが、ChatGPT を使いこなすには、使う側の知識も必要とされるように感じます。

大野:今のところはそうですね。ただ、それも先ほどの話ではないですが、「統計がないので、フェルミ推定を使って概算しますね」とか「サーチモードで検索しましょうか？」などと、いずれAIから歩み寄って提案してくれるようになると思います。

—なるほど。そうなったら、AIのほうがコミュニケーション能力が高くなってしまいますね。

大野:ただでさえ処理能力が圧倒的に高いのに、コミュニケーション能力もAIのほうが人間より高くなっていくと思います。よくAIにできないこととして、「人は人に寄り添うことができる」と言われていますが・・・

—寄り添わないですよ、人は。結局は他人だから。

大野:それにAIの能力が高くなっていくと人材教育をする必要もなくなります。例えば、

税理士業界で次に ChatGPT に何をさせるかと考えてみると、月次訪問時のトークスクリプトを作らせるようになってくると思います。今までは、そうしたことを先輩が「試算表を読み上げるだけではダメ」などと後輩に教えていましたが、いずれ ChatGPT が作ったものを読めばいいだけになっていきます。

—そうしたら、そのうち、その場でトークスクリプトをつくるようになるんじゃないですか？

大野:そうですね。それがその次のステップで、その場でやり始めます。そしてその次のステップは、お客様が自分で ChatGPT に財務状況や資金繰りについて質問するようになっていきます。そうやって次第に、私たちが提供しているものの価値が失われていくのだらうと思います。

—AI ネイティブ世代が社会に出てきたら、私たちがこれまで仕事で培ってきたものがあつという間に崩壊していきそうですね。

大野:そうしたことも起きると思います。

AI ネイティブと生成 AI ネイティブは異なるもので、Google マップや Amazon のレコメンドなど、人工知能を使ったサービスはすでに世の中にあふれています。生成 AI は、最短距離を計算したり、関連商品をおすすめ

したりするのは異なり、世の中になかったものを生み出すことができます。そして「人間が作ったものでなくてよい」というのが、生成 AI ネイティブの世界です。

これまではお客様の問題解決のために、多くの時間と労力をかけてきましたが、そうしたことは人間がやらなくていいという社会になっていくと思います。これまで高付加価値なサービスを提供しようと思って MAS 監査や経営計画などを一生懸命勉強してきたのですが、AI が生成したものをそのまま読み上げればいい世界になっていく。「そんなことにはならない」と言う人もいるかもしれませんが、これが近い将来の現実であり、生成 AI 時代の本質なのだと思います。

一なるほど。職人的な正確さなどは、求められない社会になるかもしれませんね。

大野：そうですね。それに生成 AI の進化に合わせて、社会のルール自体が変わっていくようになると思います。

例えば、絵画の世界は写真が発明されるまではどれだけ写實的に描けるかを競っていましたが、写真が出てきたら現代アートのように、一見では理解し難いものに価値を見出すように変化していきました。

ビジネスもそれと同様に、生成 AI にスピードや効率で勝てないなら、それとは異なる軸の価値で競うようになっていくと思います。

一そして、それがどういうものかは分からないということですね。

大野：これから、あらゆるものの価値が揺らいでいくと思います。例えば、知識を吸収す

るときに、本や文章などを読む必要がなくなります。書籍というものは非効率なもので、どんなに分厚い本でも知りたいことが書いていない場合もあります。書かれていなければまた別の本を漁らなければなりません。生成 AI ならその必要はありません。知りたいことをピンポイントで質問すればいいだけです。

一専門知識がいらなくなると考えると、士業はいよいよ危なくなりますね。それでもいくつかある選択肢の中から AI が判断できるのかと言えば・・・

大野：「税理士しか判断できない」ともよく言われますが、実際は税理士も判断していないですよ。いくつかの選択肢があるときには、それぞれを選択したときの状況を説明して、お客様に選んでもらっているだけです。そうした説明もいずれは AI ができるようになると思います。

一税理士業界は旧態依然で遅れています。だから、大野先生が同業者に話をするとき話さずには済まないとか、理解してもらえないことも多いのではないですか？

大野：僕は税理士は他の士業に比べて IT リテラシーは高いと思っています。毎日パソコンを立ち上げて専用のソフトを触っている士業ってあまりいないと思うんですよ。だからその分、生成 AI の時代も伸びしろがあると思っています。

あとはマインドを変えられるかどうかだけな気もしています。誰がどう思おうと、現実には進むべき方向に進んでいくわけで、だからこそ常にその動向を正確に注視しておかなければならないと思っています。■

セブセンス税理士法人

(東京都台東区)

公認会計士・税理士、ディレクター

大野修平

大学卒業後、有限責任監査法人トーマツへ入所。金融インダストリーグループにて、主に銀行、証券、保険会社の監査に従事。トーマツ退所後は、資金調達支援、資本政策策定支援、補助金申請支援などで多数の支援経験を持つ。また、スタートアップ企業の育成・支援にも力を入れており、各種アクセラレーションプログラムでのメンタリングや講義、ピッチイベントでの審査員や協賛などにも精力的に関わっている

